昭和48年11月1日発行（毎月1回1日発行）第22巻・第13号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

ロッキード
ライトニング

☆特集☆
ヨーロッパの新型軍用機を展望する①
横須賀に寄港したハンコックの搭載機
4ch・60用完全スケールRC機"疾風"

'73 NOVEMBER 11

$3.00

米空母"ハンコック"の搭載機

第55攻撃飛行隊（VA-55）のA-4F。後方はC-1A輸送機。

第211戦闘飛行隊（VF-211）のF-8Jクルーセイダー。

NP
NAVY
USS HANCOCK
302
RESCUE

〔上〕第
攻撃飛行隊
A-55）のA
Fスカイホ
ク。
〔左〕第2
攻撃飛行隊
A-4F スカ
ホーク。
なお，ハ
コックに積
れているA
Fのうち，V
-164の8機
機首にレー
攻撃用の新
備をしてい
右ページの
号機もその
機である。

〔上・右〕第164攻撃飛行隊（VF-164）のA-4Fスカイホーク。胴体に赤で“レディ・ジェシイ”と書かれているが，これは戦死した同飛行隊のディック・ペリイ少佐が本国で訓練中にお世話になった夫人の名前。彼の乗機であった401号機を記念して，その後同番号の機体にはこの名前を記入することになった。

〔上・左〕ハンコックに配備されているE-1Bトレーサー早期警戒機。第111早期警戒飛行隊(VAW-111)派遣隊の所属機である。

本機はレドームの上に紺で大きな"こうもり"を描いており，そのニックネームは"シーバット"(Sea bat)。艦との連絡などのコール・サインにこの名称を使っている。

〔上〕ハンコック艦上できれいな赤とブルーの光の尾を引いて，夜間ウェィブ・オフ（着艦復行）をするA-4Fスカイホーク。飛行甲板には第211戦闘飛行隊のF-8Jクルーセイダーが並んでいる。
〔下〕第164攻撃飛行隊のA-4F。この機体は目標を照射するレーザーのデジグネータを装備した1機で，機首先端が少しふくらんで見える。この装備をしたスカイホークは，このハンコックの搭載機が最初である。(Photos by Lt. A. P. Soderman)

グリーンハム・コモンの
英空軍航空ショー

European Air Forces at Royal Air Force Association, RAF Greenhan
Common, July 7 1973.
(Photos by Inter Air Press

（49ページ・グラビア参照）

(Inter-Air Press)

〔右上下＊下〕西ドイツ空軍のロッキードF-104G（9128）ホプステンを基地とする第36戦闘爆撃航行隊（JaboG36）の所属機で，写真上は同飛行隊エンブレムのクローズアップ（上）離陸するカナダ国防軍のCF-104G（104827）第421飛行隊所属機

(Inter-Air Press)

〔上〕フランス海軍機の空中給油の実演。前方の給油母機はエタンダールⅣP，後方はF-8Eクルーセイダー。F-8Eはランディビソー基地の第14飛行隊の所属機。〔下〕給油機のエタンダールⅣP．これもランディビソー基地に配備されている第16飛行隊所属である。胴体下に給油用の圧送装備をしている。

(Inter Air Press)

(Inter-Air Press)

〔上〕オランダ海軍航空隊の対潜哨戒機アトランチック（SP-13A）。バルケンバーグを基地としている第321飛行隊の所属機である。

〔下〕同じくオランダ海軍航空隊の哨戒機SP-2Hネプチューン。これもバルケンバーグ基地の第320飛行隊所属機。オランダ海軍機ではこのほかUS-2Nトラッカーもこのショーに参加した。

(Inter-Air Press)

(Photo by C.W.M.Moggridge)

同じくグリーンハム・コモンの展示機。〔上〕イギリス空軍のライトニングF.3（XP707）。第226実用訓練部隊第2訓練スコードロンの所属機。
〔下〕イギリス海軍のガネット（XL502）。空母アークロイヤルに配備されている第849スコードロンの所属機。

(Photo by C.W.Moggridge)

オランダ空軍創立60周年記念航空ショー

60th Anniversary Display of Royal Netherland Air Force

(Inter-Air Press)

オランダ空軍の創立60周年を記念してアーンヒム近郊のデーレン空軍基地で6月末から7月にかけて行なわれた航空ショーの展示機。〔上〕パイパーL-21Bスーパーカブ4機のデモ飛行。第300飛行隊の所属機で，同飛行隊はビーバー，アルーエトIIIも装備している。機首と胴体の黄色のマーキングは，このショーのため特別につけられたもの。〔下〕リパブリックF-84Fサンダーストリーク（P-172）。垂直尾翼に画かれているのは315飛行隊のエンブレム。2枚とも7月15日の撮影。

(Inter-Air Press)

前ページと同じくテーレン基地の見学者で、オランダ空軍のF-104Gスターファイター（D-6682）。第312戦闘飛行隊の所属機である。6月30日の撮影。

(Photo by J. P. Dorlstra)

(Photo by J. F. Poelstra

24ページにつづいてデーレン基地のオランダ空軍展示機。〔上〕DHC-2ビーバー（S-8・55-4584）。U-6Aの制式名で第300飛行隊に装備されている1機。
〔下〕スピットファイアMk9。かつてのオランダ空軍の主力戦闘機。現在はソエスターバーグ空軍基地の航空博物館が保管している。2枚とも6月30日の撮影。

(Photo by J. F. Poelstr

ダッソー　ミラージュ5　　Dassault Mirage 5

ミラージュ5はミラージュ3を改造した地上攻撃型。1967年5月に1号機が初飛行。これまでにベルギー，コロンビア，リビア，イスラエル，ペルー，ベネズエラ空軍などから約300機を受注している。写真はリビア空軍向けのミラージュ5-D，各種の武装をつけて飛行テスト中。

ダッソー ミラージュF.1 ↑↓　　Dassault Mirage F.1

ミラージュF.1はフランス空軍のミラージュ3の代替機として開発された制空戦闘機。フランス空軍用に105機の生産が決っており，オランダやスペインなどにも次期戦闘機として売り込まれている。写真下では両翼端にサイドワインダー，翼にはマトラR.530ミサイル，胴体下に1,200リットルの燃料タンクを装備している。

西ドイツ空軍のRF-4E ↑↓

RF-4 Phantom II of AG52, Deutsche Luftwaffe.

西ドイツ空軍のRF-4Eファントム II。グリーンハム・コモン基地の英空軍航空ショウ（グラビアおよびカラー参照）に出場したときのもので，レックを基地としている第52偵察飛行隊（AG52）の所属機である。上の写真で本機の特長である機首まわりのカメラ窓などがよくわかる。

(Photos by Inter-Air Press)

P2V-7 Neptune of Flotille 25, Aeronautique Navale.

フランス海軍のP2V-7とアメリカ空軍のKC-97L

〔上〕フランス海軍のP2V-7ネプチューン。第25哨戒飛行隊の所属機。〔下〕空中給油機KC-97L。ウインスコンシン州エア・ナショナル・ガードの第128給油大隊第126飛行所属機。写真は2枚ともグリーハム・コモン基地の航空ショーにて，7月7日の撮影。

(Photos by Inter-Air Press)

KC-97L of 128ARG, Wisconsin ANG USAF.

Tandem two-seat training version of Sukhoi Su-7.

スホーイSu-7戦闘機

ソ連空軍デーの飛行ショーにそなえて整備中のスホーイSu-7戦闘機。写真上はNATOで,"モージク"と呼んでいるタンデム複座の練習機。写真下は夜のエプロンを移動中のSu-7B。写真右は地対空誘導用のレーダー・アンテナ。

(Photos by TASS)

Su-7B ground attack fighter.

沖縄のスカイホーク

沖縄の那覇基地で撮影したスカイホーク。〔上〕第311海兵攻撃飛行隊（VMA-311）のA-4Eで，胴体下の懸吊ラックに小型の模擬爆弾6個を装備している。〔下〕海軍の第5混成飛行隊（VC-5）のA-4Eで，ファントムなどの射撃訓練時に，標的曳航機として活躍している機体。尾部に装備したダート・ターゲットに，MiG-21などと書いているのが面白い。

(Photos by H. Hirano)

来日した米空母“ハンコック”の搭載機

ハンコック甲板上のA-4Fスカイホーク。第164と212攻撃飛行隊の所属機。

A-4F Skyhawks aboard CVA-19 HANCOCK lying in the Yokosuka harbor.

去る8月中旬から下旬にかけて横須賀港に碇泊した米攻撃空母ハンコック（CVA-19）の搭載機。今回同艦に配属されて来日した航空部隊はつぎの各飛行隊である。

第211戦闘飛行隊（VF-211・F-8Jクルーセイダー装備）
第24戦闘飛行隊（VF-24・F-8Jクルーセイダー装備）
第212攻撃飛行隊（VA-212・A-4Fスカイホーク装備）
第164攻撃飛行隊（VA-164・A-4Fスカイホーク装備）
第55攻撃飛行隊（VA-55・A-4Fスカイホーク装備）

以上のほか第63軽偵察飛行隊（VFP-63）派遣隊のRF-8Gクルセイダー、第135戦闘電子戦飛行隊（VAQ-135）派遣隊のEKA-3Bスカイウォリア、第111早期警戒飛行隊（VAW-111）派遣隊のE-1Bトレーサーも配備されている。

〔上・下〕第212、164、55各攻撃飛行隊のA-4F、VA-212は300番台、VA-164は400番台、VA-55は500番台のナンバーを機首に記入している。

〔上〕第55攻撃飛行隊（ウォーホーセズ）のA-4Fと〔下〕第212攻撃飛行隊（ランパートレイダース）のA-4F。第164攻撃飛行隊のスカイホークには、複座のTA-4Fが1機、機首にレーザー攻撃用のデジグネータを新しく装備した機体も含まれている。

〔上〕機首に200番台のナンバーをつけた第24戦闘飛行隊（チェックメーテス）のＦ-８Ｊクルーセイダー。

〔下〕同じく機首が100番台の第211戦闘飛行隊（チェカーティルズ）のＦ-８Ｊ。現在の第211戦闘飛行隊は1959年３月に第24戦闘飛行隊（ＶＦ-24）が改称したもの。同時にそれまで第24戦闘飛行隊であった部隊は、第211戦闘飛行隊となった。1968年にＦ-８Ｊを受領、ともに尾翼にチェッカーをつけて飛びまわっている。

F-8Jクルーセイダーの尾部マーキングのクローズアップ。上左は下の写真と同じ機首に100番のナンバーをつけた第211戦闘飛行隊機.上右は左上写真と同じく第24戦闘飛行隊所属機の尾部である。

〔上〕白いレードムの見える艦橋と唯1機配備されているC-1Aトレーダー輸送機。このほか第1戦闘支援ヘリコプタ飛行隊（HC-1）のSH-3Gシーキング・ヘリも積まれている。

〔左〕A-4Fスカイホークの機首クローズアップ。上は第55、下は第212 攻撃飛行隊の所属機。

グリーンハム・コモン基地で開かれた

The Royal Air Force display at Greenham Common. (part2)

英空軍航空ショー《続》

7月7、8の両日、イギリスのグリーンハム・コモン基地で開かれた英空軍航空展示会の続報。〔上〕ハリアーGR.1。第232OCU（実用訓練部隊）の所属機。〔下〕西ドイツ海軍のアトランチック哨戒機（61-07）。第3哨戒飛行隊（MFG.3）の所属機である。西ドイツ海軍では、本機で2個飛行隊を編成している。

(Photos by Mr. Clive W. Moggridge)

〔上〕米海軍の参加機P-3Cオライオン。第56哨戒飛行隊の所属機。西ドイツ、フランス海軍のアトランチック、オランダ海軍、フランス海軍のネプチューンと各種対潜哨戒機が顔をそろえてデモ飛行をした。

〔上・下〕米陸軍のOV-1Dモホーク。西ドイツ駐留の第73軍事情報部隊の所属機。OV-1Dはモホークの最新型。上の写真の機体は胴体下のSLAR（側視レーダー）を装備している。

〔上〕イギリス空軍航空支援軍団のＶＣ.10輸送機。支援軍団では現在、本機を14機装備している。フラップを降して会場上空を低速パスするシーン。

〔上〕フランス海軍のアトランチック対潜哨戒機。フランス海軍では、本機を40機受領、ＳＰ-2Ｈネプチューンと併用して5個飛行隊の哨戒部隊を編成している。〔下〕49ページ下の写真と同じく西ドイツ海軍のアトランチック61-07号機。

〔上〕このショーではスピット、ハリケーンなどの2次大戦機の飛行展示もあった。写真はアブロ・ランカスター爆撃機。ウォデントンを基地とした第44スコードロンの塗装にしてある。

〔左・下〕イギリス海軍のシービクセン。第2全天候戦闘飛行隊（FAW-2）の所属機でシデンハム基地から飛来したもの。

〔上〕フランス海軍のSP-2Hネプチューン。ロリエを基地とする第25哨戒飛行隊の所属機。フランス海軍は本機を20機保有しており、次第にアトランチックと代替させる計画である。

〔右・下〕オランダ海軍航空隊のSP-2Hネプチューン。バルケンバーグを基地とする第320哨戒飛行隊の所属機。オランダ海軍航空隊は、本機とS-2を含めて約30機の哨戒機を保有している。

フォート ニュース

このページと次ページは、モスクワから700キロほど南東のサラトフにあるヤコブレフ工場でのY ak-40旅客機量産の模様。西側諸国にも盛んに売り込まれているY ak-40は、すでに約400機を生産、最近は隔日に1機のペースで量産が進められており、最終目標は2,000機の生産計画であるという。写真は最終組立てショップで、エンジンを取りつけ中である。広大な国土に翼を延ばしているアエロフロートは、約30人乗りの本機は1,000機ほどの需要があるといわれ、本機を大型化した120人乗りの3発ジェット旅客機Y ak-42開発の計画もたてられている。　(Photo by TASS)

Yak-40のエンジンはイフチェンコAI-25ターボファンであるが最近このエンジンがタービン・ブレード冷却装置付きに改造されて推力は3,300ℓb（1,497kg）から3,850ℓb（1,746kg）と550ℓb（249kg）ほど向上しているといわれ、この改良型エンジンを装備した民間のYak-40は、Yak-40Bと呼ばれているという。

量産の能率化をはかって作業は電子計算機を大幅に採用した流れ作業。上の写真ではエンジンの取付けと同時に、主翼の燃料タンクの取付けも行なわれている。

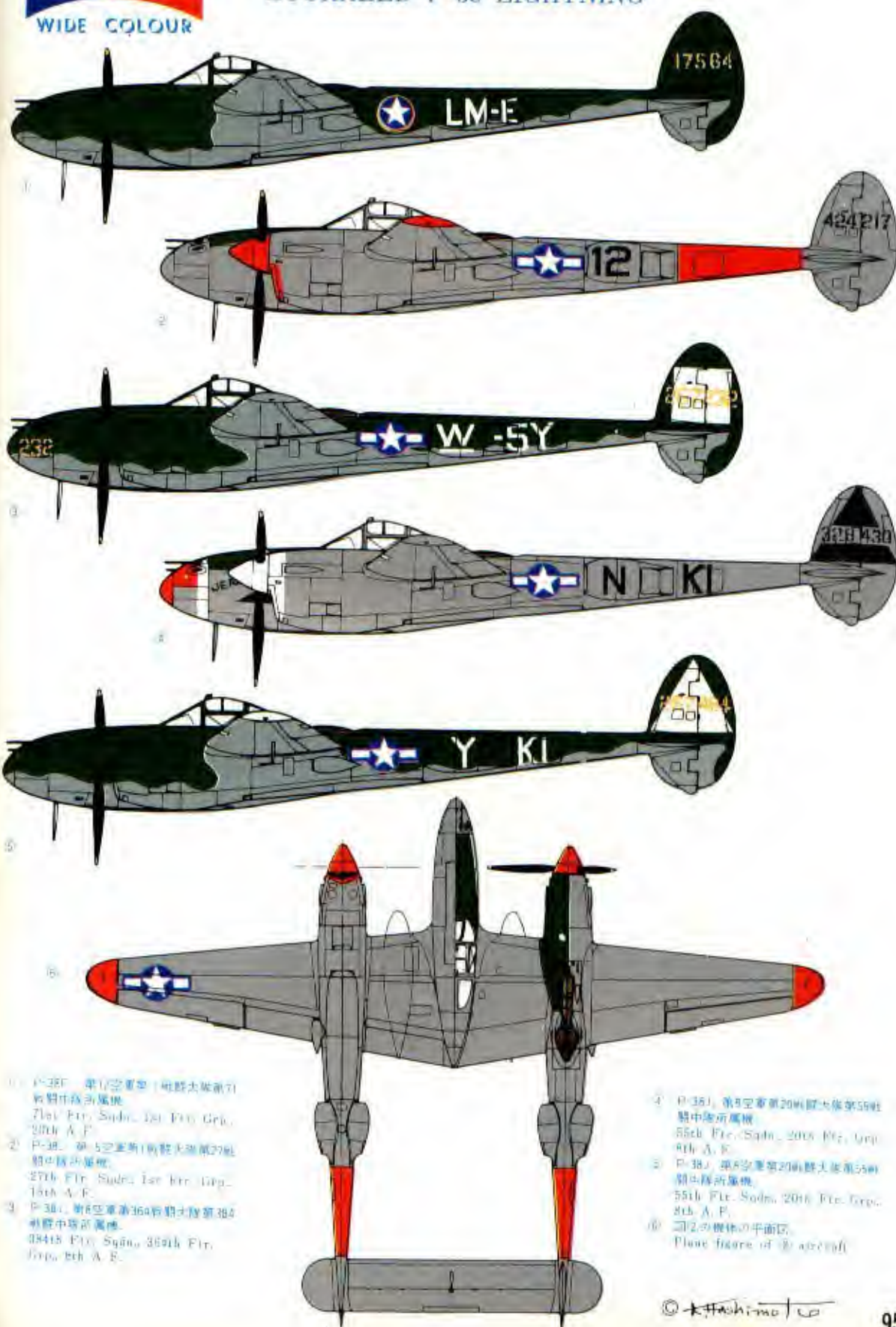
〔上〕スイス・アルプスの主峰マッターホルン上空を飛ぶスイス航空のDC-10-30。同機はすでに同航空の大西洋線に就航しているが、来年春からは極東路線に登場。東京にも姿を見せることになる。なお、同航空では同型機の乗組員として、初めて日本女性のスチュワーデスを募集することになった。

〔下左〕数かずの世界記録をたてているソ連のテスト・パイロット　アレクサンドル・フェドトフ。同パイロットはこの春、制式機のE-266で100kmの周回コースを時速2,600kmで飛び、最近は36,240kmの高度記録も樹立している。(TASS)

〔下右〕米海軍に引渡された400機目のP-3オライオン。157機のP-3A、144機のP-3B、1機のP-3Dとこんどの98機目のP-3Cで、米海軍のオライオンは400機。写真は去る7月30日に行なわれた納入式のシーンで、左からロッキードのD.J.ホートン会長、米海軍太平洋哨戒機部隊指揮官H.S.アインスワース少将、ロッキード・カリフォルニア社R.A.ファーマン社長。

スナップ だより

〔上〕空母ハンコックに積まれて来日したEKA-3B。第135戦術電子戦飛行隊（VAQ-135）第5派遣隊の所属機。厚木基地にて撮影（横浜市・山口幹夫）。〔下〕インドネシアのメルパチ・ヌサンタラ航空のYS-11。同機は1970年12月6日に伊丹からフェリーされ、以来2年半飛びつづけ、1973年8月2日にオーバーホールのために、ふたたび大阪伊丹空港に飛来したもの（豊中市・伊藤直行）。

〔下〕9月2日、シアトルからシンガポールへ空輸の途中、東京国際空港に立ちよったSIA（シンガポール航空）のボーイング747。同航空の747は、10月1日から東京国際空港に乗り入れを開始する（武蔵野市・井上智雄）。

水平・急降下爆撃，雷撃から偵察そして夜間戦闘とあらゆる任務に駆使された2次大戦ドイツの双発戦闘爆撃機ユンカースJu88。上と下の写真は，イタリア地中海沿岸のドイツ軍前線基地に無傷のまま残されていた1機で，アメリカ本土に運ばれた最初のドイツ軍ろ獲機であった。写真上のドイツ軍マークは，のちに下のように米軍マークにかえられた。98ページ・カラーも同じ機体である。
(USAF Photo)

ユンカース Ju-88D-1

米軍にろ獲された Ju-88D-1。塗装は米軍がろ獲後に塗りかえたもの。（USAF Photo）

Junkers Ju-88D-1

この写真もアメリカ軍がろ獲して，本国で飛行テストを行なったJu88Aの1機。完全な米空軍機の塗装にしてある。
(National Archives Photo)

（上）機首にFuG218ネプチューン・レーダーのアンテナを突き出したJu88-7G。G-7はユモ213Eエンジン（1,750HP）装備で、実戦に参加したのは、終戦まぎわであった。写真の機体はチェコスロバキアで米軍に鹵獲された1機で、チェコからアウグスブルク飛行場に空輸されたもの。胴体のドイツ軍マークの上に略式の米軍機マークを描いている。（US Army Photo）

（下）前ページと同じくアメリカで飛行テストされたJu88A。（National Archives）

メッサーシュミット Me-410

これも戦後米軍の手に入ったMe410戦闘爆撃機。Me210の改造型で約1,000機が生産されている。 (USAF Photo)

WK

メッサーシュミットMe410　Messerschmitt Me410

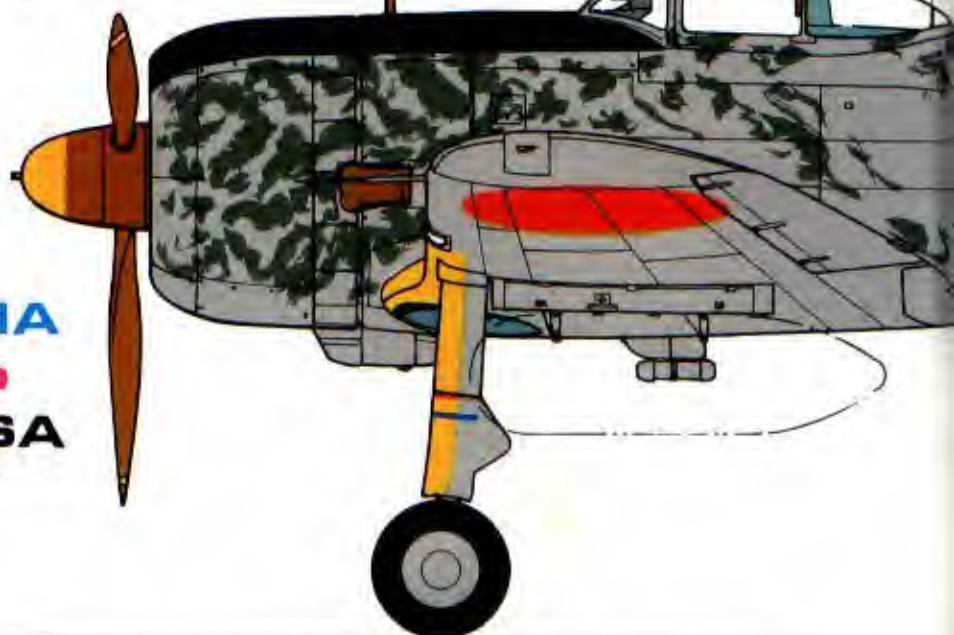
メッサーシュミットMe410は，Me210双発複座戦闘の発達型で，高速爆撃，重戦，写真偵察型と各型が終戦までに1,000機余が生産されている。上と下の写真の機体は写真偵察型Me410A-3（D1BF6＋Wk）。地中海方面で作戦した2.(F)/122・第122長距離偵察隊第2中隊所属機・の所属機であったもの。

写真は連合軍が戦後に撮影したもので，102ページ・カラーも同じ機体である。〔National Archives Photo〕

メッサーシュミットMe410　Messerschmitt Me410

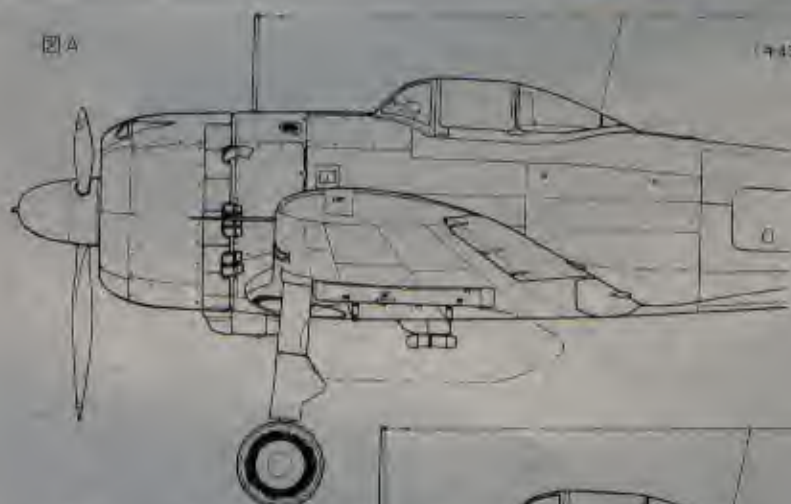
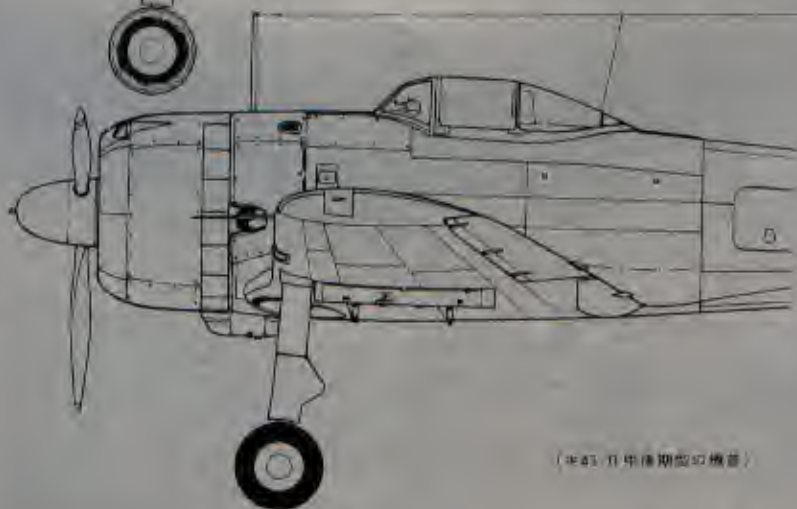
メッサーシュミットMe410は，Me210双発複座戦闘の発達型で，高速爆撃，重戦，写真偵察型と各型が終戦までに1,000機余が生産されている。上と下の写真の機体は写真偵察型Me410A-3（0I8F6＋Wk），地中海方面で作戦した2.(F)/122・第122長距離偵察連隊第2中隊所属機の所属機であったもの。

写真は連合軍が戦後に撮影したもので，102ページ・カラーも同じ機体である。（National Archives Photo）

①

NAKAJIMA
KI43-II b
HAYABUSA
1/32 SCALE KIT

図A

（キ43-II改の機首）

図B

（キ43-II甲後期型の機首）

① キ43-II乙。飛行第25戦隊本部所属機。
Ki43-II Otsu, 25th SENTAI Commandant Sqdn.
② キ43-II甲，飛行第54戦隊所属機。
Ki43-II Ko, 54th SENTAI
③ キ43-II乙。飛行第204戦隊第2中隊中隊長機。
Ki43-II Otsu, flown by Commander of 2nd CHUTAI, 204th SENTAI
④ キ43-II乙。飛行第64戦隊第1中隊中隊長機。
Ki43-II Otsu, flown by Commander of 1st CHUTAI, 64th SENTAI

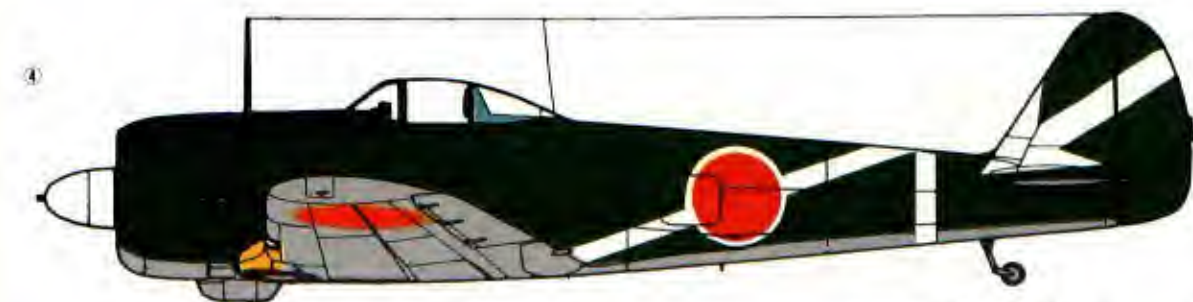
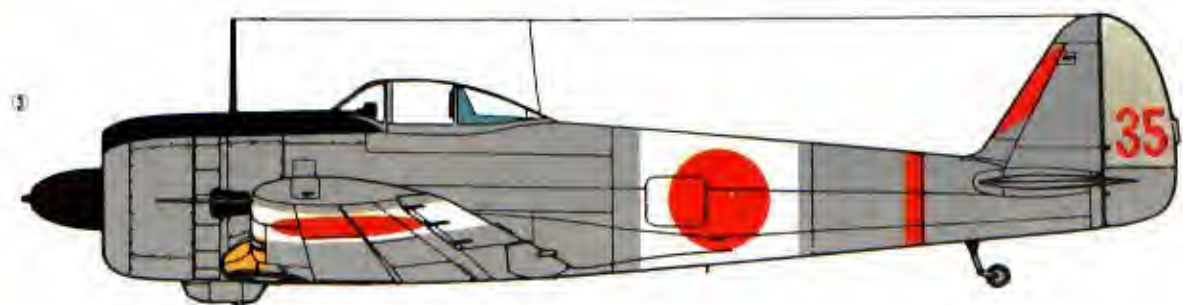
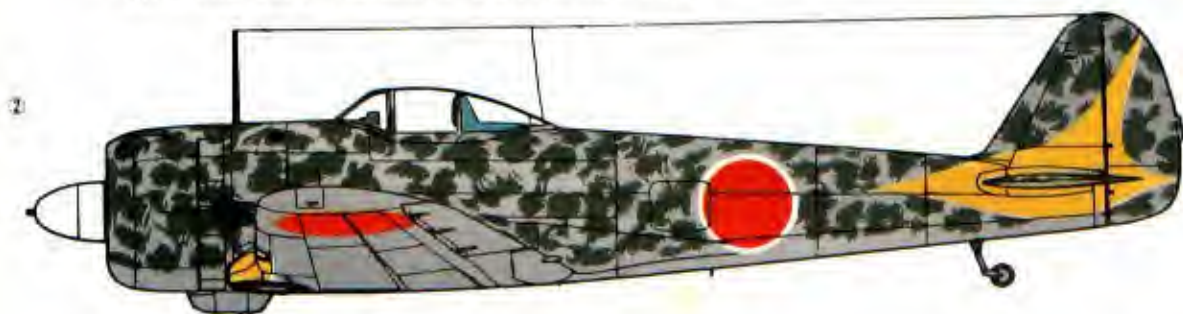
②

③

35

④

© K.Hashimoto

ハイモデリングのための
レベル資料集

中島キ43Ⅱ乙　陸軍1式戦闘機「隼」

NAKAJIMA KI-43-II OTSU ARMY TYPE 1 FIGHTER "HAYABUSA"

☆キットについて☆

1/32スケールの「隼」として最初の本格的モデルがレベルから発売される。本誌折込み図面が基本となった仕上りで，詳細なエンジンとコクピットをもち，キャノピは開閉どちらか好みに組立てられ，翼下に増槽2個を装備，精巧なリベットや羽布張り面の表現なども例によって素晴らしく，「隼」の決定版といえる優秀な作品である。

デカールは6種が附属，カラー塗装説明図付きでいろいろのバリエーションが楽しめるデラックス・キットである。このレベル資料集で述べてあるように，少しの改造で甲型後期型や2型改に改造することもでき，各型のバリエーションも意外とラクに楽しめる。

☆塗装について☆

図①　飛行第25戦隊戦爆本部所属の2型乙(後期)で，塗装は全面シルバー⑧の地色で，上・側面に濃緑色⑯のまだら迷彩があり，エルロンと昇降舵，方向舵など羽布張り面はフラットシルバーの地色。機首の光線反射よけは黒紺のつや消し㉝+㉞。機体内部は青竹色㊼なのは各機とも共通である。主翼の前縁とスピナの先は黄橙色㊻，翼の上面は胴体と同ようの濃緑色のまだら迷彩である。

図②　飛行第54戦隊の所属機で2型甲後期型，塗装は図①と同様に全面シルバーで舵面だけフラットシルバー，上・側面に濃緑色のはん点迷彩がある。スピナは白①+㉚，戦隊マークは黄橙色。

図③　飛行第204戦隊第2中隊の中隊長機で，塗装は全面シルバー，方向舵は明灰白色㊻，スピナは暗赤褐色㊶+③，光線反射よけは黒紺のつや消し。

図④　飛行第64戦隊第1中隊の中隊長機。塗装は機体の上・側面が濃緑色⑮で，下面はシルバー⑧，エルロンと昇降舵の下面はフラットシルバー⑧+㉚，スピナは白①+㉚の塗装，反射よけは黒紺のつや消しである。

☆改造☆

〔図A〕　図のように改造すれば2型改を作ることができる。まずカウルフラップに3ヵ所の切りかきを作り，ランナー材で図のような排気管を片側6本づつ自作して取りつけ，胴体の下の燃料クーラーはそのまま使用する。

〔図2〕　2型甲の後期型で，図のように排気管とカウルフラップを改造すればよく，胴体下の燃料クーラーは使用しない。

なお，2型乙の場合，初期型は燃料クーラーがついていないから，塗装仕上げによっては使用しないように注意。　　　　（イラストと解説・橋本　喜久男）

⬅Ki43-II Otsu early version, Kumagaya Flying School.　⬆Ki43-II Kai. Tail letter pronunce in Japanese "yo".

⬅［写真A］　熊谷飛行学校所属の２型乙初期型。全面シルバーで日の丸は全部白帯つき。尾翼のマークは黒に白ふちがあり，横帯は赤に白ふちと推定される。
⬆［写真B］　排気管が推力式の単排気となった２型改で，塗装は上・側面が濃緑色で部分的にはげ落ちており，垂直尾翼に「よ」の文字，方向舵には"筆記体"で「第一飛」と記入されている。　(USMO Photo)

KIT:
The world-first full-fledged 1/32 scale model kit of HAYABUSA, the Nakajima Ki-43 Fighter "Oscar", is now on sale from Revell. The illustrator of koku Fan is glad to learn that this deluxe kit was manufactured on the basis of the fold-out wide color drawing once carried on the magazine. To say nothing of the perfect copy of the 1,000 hp engine, which Revell is good at, the kit is designed so that kit fans can build up the canopy in two ways, either open-door or closed. Two drop tanks. Good expression of rivets and fabric cover. All model kit specialists unanimously recommend that this is the "final edition" of the Japanese Army plane, furious in the southern Pacific theater early in the WWII. Six kinds of decal are attached with the kit. Enclosed color painting explanations are informative for kit fans to enjoy the painting variations. Kit fans also can enjoy plane version variations, as it is easy to make the latter version of the Ko model or II-Kai model, in the light of color figures shown at Page 106-107.

PAINTING:
Fig.1. This is the Ki-43-II-Otsu (latter version) of the Hiko 52nd Sentai (flight combat regiment) Headquarters. Totally painted in Revell Color (RC) 8, silver. The fuselage top and sides and wing upper surfaces are dot-camouflaged with RC-16, dark green. The fabric covering parts of aileron, elevator and rudder are flat silver. The nose back is painted RC 33 plus 34, non-glare blue black to kill reflected light. The plane insides are RC-57, malachite green. The front edges of main wings and the spinner tip are RC-58, orange.
Fig.2. Ki-43-II-Ko, 54th Sentai. Like Fig.1, this is all silver except the aileron upper surfaces which are flat silver. The fuselage top and sides are spot-camouflaged with dark green. The spinner is RC 1 plus 30, white. The Sentai (combat regiment, or wing) mark on tail is orange.
Fig.3. This is Chutai (company) Commander's plan of the 204th Sentai, 2nd Chutai. Silver. The rudder is RC-56, gray and the spinner is RC 41 plus 3, dark red-brown. The nose anti-reflection paint is non-glare blue black.
Fig.4. This is the Chutai Commander's plane of the 64th Sentai, 1st Chutai. The top and sides of the fuselage are RC-16, dark green, and the undersurfaces are silver. The aileron and elevator undersurfaces are RC 8 plus 30, flat silver. The spinner is RC 1 plus 30, white. The anti-reflection paint is non-glare blue black.

REMODELING HINTS:
Fig A. Easy to remodel the kit to the Ki-43-II Kai with the figure as a reference. First, make a total of 12 exaust tubes with waste chips.
Scratches three parts of the cowl flap to place six exaust tubes on each side as shown in the figure. The fuel cooler underneath the fuselage remains as it is.
Fig B. This is the latter version of Ki-43-II-Ko. As shown in the figure, main remodeling points are exaust tubs and cowl flaps. This model had no fuel cooler underneath the fuselage. The early version of the II-Otsu model also had no fuel cooler, so care should be taken in painting.

(Drawing and Commentary by Kikuo Hashimoto)

アメリカで復元されたキ43-II乙。戦後しばらくのあいだスミソニアン博物館に保管されていたもので，復元後は各地で展示されている。飛行第63戦隊のマークを第1中隊所属を尾翼に示す白で記入している

双発双胴という珍らしい形式の単座戦闘機。P-38ライトニングは米陸軍空軍にとって、初めての双胴飛行機、最初の双発単座戦闘機でもあった。大戦終了までに9,923と1万近くが量産され、あらゆる戦場に投入されて、本来の高々度迎撃戦闘のほかにいろんな任務に使われており2次大戦の米陸軍では最も著名な戦闘機の一つ。これまで本誌にもたびたび登場しているが、今回はそのなかでも珍らしいスナップを選んで紹介することにしよう。

〔前ページ〕P-38はアメリカが2次大戦に参戦する前に量産が始っていた。写真は1941年、大戦突入前の初期の頃のP-38。部隊に配備されてまもない3機の編隊飛行。

〔左上・左下・上・下〕1942年初めから量産が始められたP-38のF型。F型から左上の写真に見られるように内翼下に増槽が吊せるようになり、進攻戦闘機としての性格も加味されることになった。ここには 2,000ポンドまでの爆弾や雷魚も装備することができた。写真左2枚と下はヨーロッパの戦線に送られたP-38F。写真上はインド方面に派遣された1機で第459戦闘中隊の所属機。1944年2月の撮影である。

【上】P-38J。1943年8月頃から実戦部隊に配属されたJ型は燃料容量をふやして航続力がさらに強化された型。スピナの下に"あご形"のラジエター吸気口がついて、この部分が以前の型と大きく異なることになった。2,970機とL型に次いで多く生産されている。写真は第28偵察中隊所属機で、内翼下のタンク先端を透明風防にし、偵察員がもぐり込んで写真偵察に向うところ。1945年1月15日、沖縄進攻時。後方は爆装したコルセア。

〔左下〕1943年秋、オランダ海岸のドイツ軍基地爆撃作戦に活躍した第8空軍の第55戦闘大隊第38戦闘中隊のP-38J。300ガロンの落下増槽2個を装備して、第8空軍のP-38はドイツ領深く進攻する爆撃機の援護に大いに働いている。〔下〕1944年6月6月のノルマンディ上陸作戦開始後、初めてフランスの米空軍前進基地に進攻したP-38J。第9空軍の第474戦闘大隊の所属機である。

〔上・下〕太平洋戦線に投入されたP-38J。南太平洋方面で最初に作戦したライトニングは、オーストラリアを基地にニューギニア方面のパトロールに飛んだP-38E改造の写真偵察型F-4であった。1943年9月以後、第5空軍の第8、35、475、49航空大隊と四つのP-38航空大隊が編成され、広大な太平洋戦線の各地で戦闘している。第5空軍には40機撃墜のリチャード・ボング少佐、38機撃墜のトーマス・マクガイア少佐など、数多くのライトニングのエースが生まれているが、その戦果の多くは写真のP-38J型によるものであった。

未発表海軍機写真集

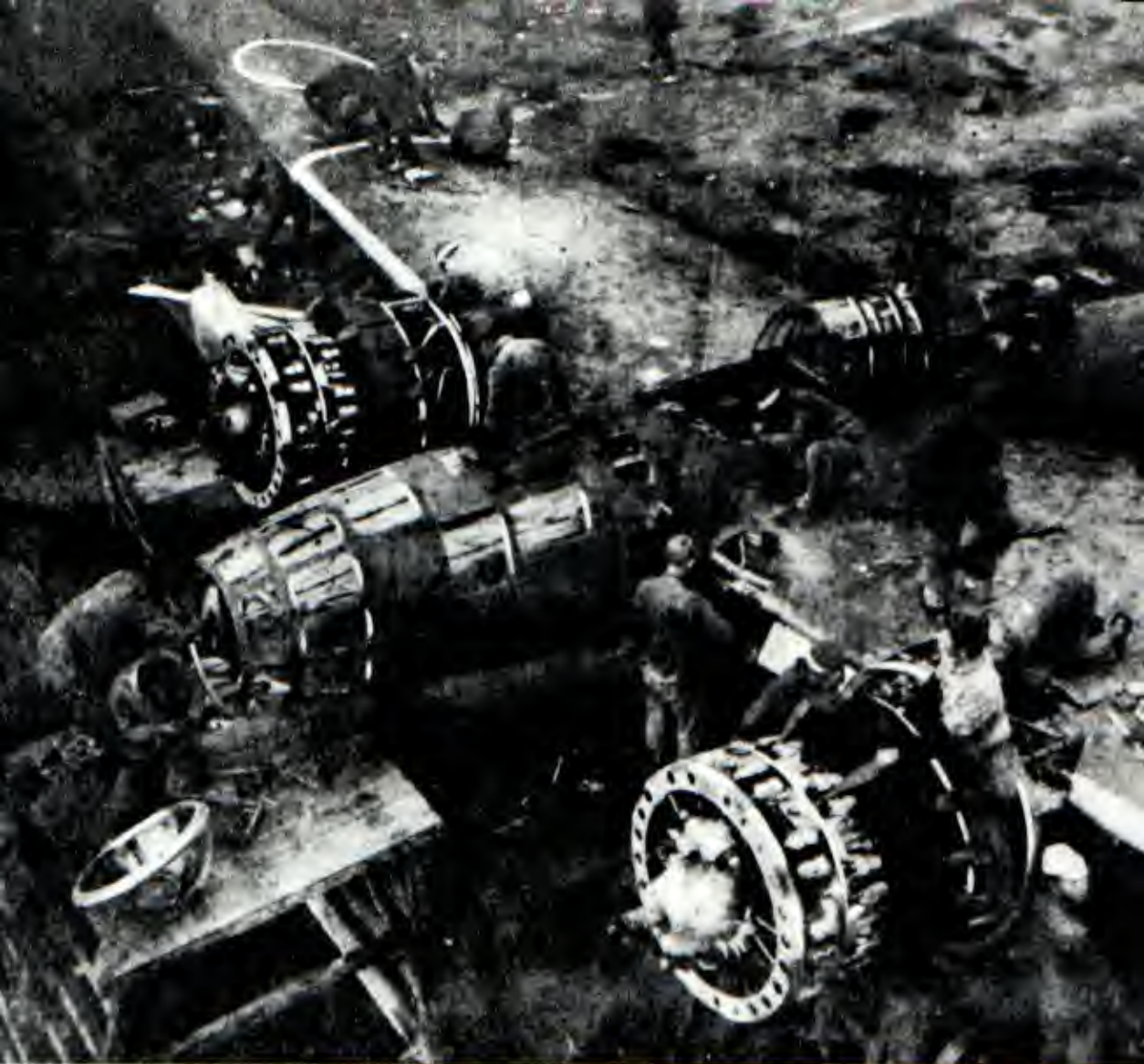
陸上爆撃機

銀河

NAVY BOMBER "GINGA" (P1Y1～6)

GINGA Bombers of Yokosuka Air Corps

海軍の高速陸上爆撃機「銀河」は大戦末期の昭和19年春に第一線にデビュー、終戦まで海軍攻撃機の主力として活躍した。1機で雷撃、水平爆撃、急降下爆撃の任務を兼ねさせるのがねらいであったが、複雑な機構の飛行機で、整備に骨が折れ、発動機の不調もあって充分な働きができなかったのは惜しまれる。空技廠で試作され、中島の小泉工場で終戦までに各型を含めて1,000 余機が生産されている。

〔前ページ〕尾翼に「ヨ」のテイル・レターを書いた横須賀航空隊の所属機。〔上〕出動準備成って乗員が乗り込むところ。パイロットはすでに中央の座にすわっている。前方は航法兼爆撃手、後方は無線兼射手で、機首に突き出ているのは20ｍｍ機関砲。胴体後上方に13ｍｍ機銃1挺も装備していた。〔下〕主翼下に増槽を付けて特攻に出撃する「銀河」。九州の基地と思われる。〔右上〕中島飛行機小泉製作所で生産中の「銀河」。〔右下〕増槽をつけて待機する「銀河」。豊橋を基地とした第522航空隊の所属機。

The Kugisho Bomber "Ginga" (P1Y1), mabe its debute in the spring of 1944, acted as the mainstay attack bomber for the Japanese Navy until the war-end. A total of 1,000 planes of various models were produced by Nakajima, after being test-manufactured by the Kugisho.

このページと次ページの4枚は、特殊攻撃機「桜花」22型に装備されるツ-11型エンジン・ジェットの空中テスト母機となった「銀河」の試作3号機。昭和19年10月、霞ケ浦でテスト中のもので、胴体中央部下面にツ-11型エンジン・ジェットが見える。テスト・パイロットは空技廠の河内大尉。点火、振動などの空中テストを行なった。

特殊攻撃機「桜花」22型は、ツ-11型エンジン・ジェット1基を付け、自力の航行ができるようにしたものであったが、昭和20年8月12日、その母機となった。「銀河」からの最初の離脱飛行試験に失敗し、2回目のテストの準備中に終戦となってしまった。

なお写真の「銀河」試作3号機は生産型と異なり、エンジンの排気管は集合式となっているほか、水平尾翼に上反角が付けられている。

No.3 prototype of "Ginga", the plane used as the test-bed of the "Engine-Jet Tsu-11" engine to be mounted on the Navy special attack bomber, "Oka-22". The test underway at Kasumigaura AB. Note the engine in question seen underneath the fuselage.

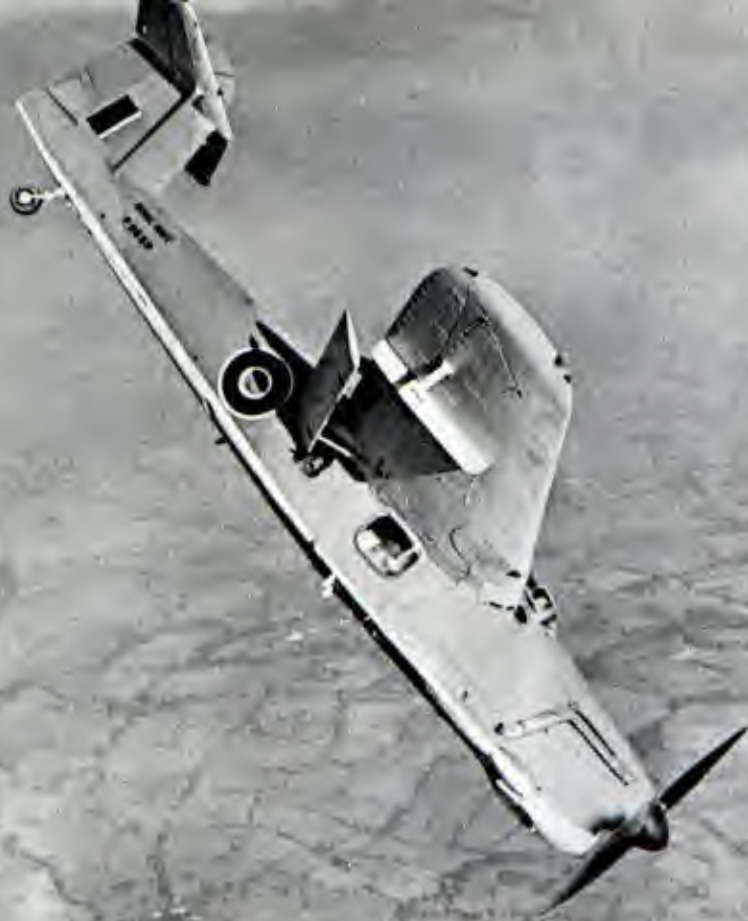
これらの日本機はどうなったか《2》

What Happened to Those Japanese Planes?

前号につづいて、戦後アメリカに持ち去られた日本の軍用機。

写真左はアメリカに持ち込んで機体各部の調査や飛行テストを終えて保管されている日本機。朝鮮動乱のぼっ発で、基地の施設がふたたび活用されることになり、イリノイ州パークリジ基地やナショナル・エア・ミュージアムの格納庫内に保管されていた日本機やアメリカの第2次大戦機は屋外に繋留されることになった。写真はそのころのスナップで、後列左からP-38、木製化した疾風のキ106、月光、屠龍、疾風、彩雲、銀河などが並んでいる。このころは、日本機もいつでも飛び立てるような良好な状態であった。写真はパークリジ基地にて。

写真下は空母コアの飛行甲板に繋留されてアメリカに運ばれる日本機。後方に晴嵐、その前方に5式戦、キ109、飛龍、瑞雲、中央に強風と日本の陸海軍の精鋭機が並べられている。1945年11月16日の撮影。

フェアリー バラクーダ

FAIREY BARRACUDA

2次大戦機アルバム

フェアリー・バラクーダは複葉のアルバコアの後継機として造られたイギリスで最初の全金属単葉艦上雷・爆撃機。バラクーダ（かます）のニックネームが示すように、"下あご"の突き出た胴体にレーダー・マストや独特のフラップなどでにぎやかな片持高翼の主翼、高い位置の支柱付き尾翼、変った引込方式の支柱の長い主脚と決して美しい姿態とはいえないが、大戦後半の英海軍航空部隊で大きな働きをした攻撃機であった。最初の生産型はロールスロイス・マーリン30(1,260HP）エンジン装備のMk.Ⅰで、マーリン32(1,640HP)にかえて4翅プロペラにしたMk.Ⅱ、対潜哨戒型のMk.Ⅲと全部で2,572機が生産され、大戦後にはグリフォン・エンジンを積んだMk.Ⅴ(5)も約30機が造られている。主に欧州の戦場で活躍したが、一部は空母イラストリアスなどで太平洋方面にも派遣され、スマトラ地区の日本軍基地を攻撃している。

〔左上・上〕最初の生産型バラクーダMk.I。軍の仕様24／37（会社名フェアリー・タイプ100）によって設計製作されたバラクーダは、原型1号機（P1767）が1940年12月7日に初飛行。原型2号機も翌41年6月29日に飛行したが、優先機種の大量産生に追われて開発が遅れ、生産型Mk.Iの1号機が飛んだのは1942年5月18日。生産計画はまる2年の遅延であった。Mk.Iは25機が造られている。写真左上は急降下中のシーンで、主翼後縁に付けられたヤングマン・フラップが作動状態になっている。このフラップは30度まで傾いて、ダイブ・ブレーキとして使われた。

〔左下〕バラクーダの原型1号機（P1767）。原型1号機の水平尾翼は、写真でおわかりのように低い位置のオーソドックスなものであったが、大きなヤングマン・フラップの作動時にバフェッティング（攪乱気流による振動）を起すことがわかって、高い位置にとりつけられることになった。

〔下〕バラクーダMk.II。Mk.Iのマーリン30をマーリン32に代え、3翅プロペラを4翅にしたのがMk.II。機体重量は600ポンドほど増えて14,100ポンド（6,395kg）となっている。写真のP9647はMk.Iとして生産されたが、途中で改造されてMk.IIの原型となった機体。

〔上〕胴体下に1,620ポンド（735kg）魚雷を吊して飛行中のバラクーダMk.II。Mk.IIはこの魚雷1本または450ポンド爆弾4発か250ポンド爆弾6発を装備することができた。バラクーダは特異なヤングマン・フラップを活用して急降下爆撃でめざましい働きをしており、雷撃には数えるほどしか出動しなかった。

バラクーダMk.IIが初めて実戦部隊に配備されたのは1943年1月10日、ストレットン基地の第827スコードロンがアルバコアに代えて12機を装備している。同年2月に第810スコードロンもバラクーダに機種改変、翌44年1月艦隊航空部隊の12個スコードロンがバラクーダで第一線配備についた。初出動は空母イラストリアスに配属された第810スコードロンの各機で、1943年9月にイタリーのサレルノに上陸する連合軍の掩護であった。翌44年4月には、バラクーダの名を高からしめることになったドイツの戦艦ティルピッツ攻撃に出動している。

エアラインの翼

SABENA　ベルギー航空　③

〔上〕リビイ・リパン（Levy-Lepen）飛行艇。ベルギーでは月号で既述のように、航空輸送推進のための準備機関として919年に国立の企業財団SNETAを発足させた。SNETA欧州と同時に植民地であった中央アフリカのコンゴ（現在のイル）でも航空輸送拠点を開発するために河沿いに飛行艇で飛行テストを行なっている。写真もその1機で、300馬力のルー・エンジン装備で3人乗り。6機がアフリカに派遣され、ンシャサとキンサンガニイ間を皮切りに、各地に翼をのばし。

〔下〕ブレリオ・スパッド33。1920年から22年にかけてSNEAは40機余の飛行機を装備したが、スパッド33もその一つ。923年5月23日にSABENA航空が公式に発足することになて、4機がSNETAから移譲されている。

〔上・左〕地上滑走に入る太西式スバルプレーン。本機はL-22グライダーの主尾翼をそのまま使用、スバル1,300ccエンジンをつけたもの。もちろん飛行可能であるが、この日の大会では、参加全機が飛行を禁止され、エンジンを始動しても滑走路上を端から端まで滑走するのみ。

（下）ライト航空が出品したベンセン・ジャイロコプター“ウハウハ号”。

〔上〕横浜の牧野氏が製作した木製羽布張りの複葉機F008 MHO（マキノ式）235。黄色塗装仕上げの美しい複葉機である。
本機のデータは全幅5.60m，全長5.00m，全高1.60m，空虚重量200kg，全備重量275kg，乗員1名。エンジンはVW1200cc（4CL 水平対向，最大出力30Ps3200RPM）装備。最大速度80km／hr，巡航速度70km／hr，失速速度50km／hr。

〔上・左〕福島県の国分正紀氏が製作したローター・カイトKア“ハミングバード”。折りたたみ式飛行機で軽4輪車の屋根にのせて簡単に運ぶことができる。風にのってタコのようにホバリングもできるローター・カイトである。